

## 終わりに

「経営革新研究会」は中小企業診断協会より研究委託を受け、研究テーマの基本コンセプトの策定、研究員の選定などを経て、17名の診断士により、第1回の研究会を平成8年9月27日にスタートし、完成の平成9年2月まで8回の研究会を開いた。

研究員は17名、延べ8回の会合、1日会議時間は6時間、これを全部乗ずると816となる。報告書の執筆は研究員各自が自宅で行なったので、最低ほぼ同じ816時間は掛かっていると思われる。合計すると1,632時間になる。診断士の1日の実働6時間とすると272日になる。祝祭日を休業とすると、優秀な診断士が朝から夕方まで、毎日張り詰めてほぼ1年間研究し、執筆した成果がこの報告書と言うことになる。その価値は充分ある内容と我々は自負しているが、本書を手にした皆さんの評価はいかなものだろうか。

本報告書は予算の制約から当初は100頁を予想していたが、担当者の原稿が出揃うと200頁超となった。いずれも力作でカットするには忍びないので最小限のカットに止め、出版の運びとなった。

報告書が分厚くなったには大きな理由がある。研究会の中頃に入って「アメリカ発の100年に1回」と言われ、景気循環説にも当てはまらない、世界的大不況に突入した。そしてアメリカのオバマ新大統領はこの難局を乗り切るには「チェンジ」しかない、アメリカ国民、そして世界に訴えた。

我々も、この難局を乗り越えられる中小企業の経営革新支援をするには、従来の管理手法から「チェンジ」する必要があるのではないかということになり、リーダーの小林勇治会員の商標登録手法で、かつ実務で多くの成果を上げている「ミーコッシュ経営革新手法」を全面的に取り入れることにした。

このため、ほぼ完成に近かった報告書の執筆スケルトンを全面的に改めた。このために先行して原稿執筆を進めていた研究員の書いた原稿は使用できなくなるなど研究員の犠牲も出た。しかし、より、役立つ経営革新の手引書を作るためには、全研究員は多少の犠牲はこの際止むを得ないと了承した。

新しい執筆スケルトンは「ミーコッシュ方式」が理解し易いよう、項目の深掘りに深掘りをした。このため普通の執筆スケルトンは「章、節、項」程度で終わるものが、何という区分なのかわからぬほどに細分、深掘りされる結果となった。その結果が分厚い頁数となったのである。

しかしこれによりミーコッシュ革新手法が普及し、経営革新の成果が出る中小企業が輩出すれば、我々はこれに越す喜びはなく、研究員として誇りと思う。